

https://farid.ps/articles/arguing_with_an_ai_sceptic/ja.html

AI懐疑論者と議論しようとして学んだ教訓

このエピソードは、私が投稿した政治的なミームから始まった：ドナルド・トランプとベンヤミン・ネタニヤフがオレンジ色の囚人服を着て、二段ベッドに座り、その上に温かく懐かしいクリスマスのオーバーレイで「All I Want for Christmas」と書かれたもの。視覚的な皮肉は即座に鋭く響いた。この画像を作成するには、意図的な回避策が必要だった。現代の画像生成モデルには、ポリシー上の保護機能と技術的な一貫性の制限がある：

- Grokは著名人の風刺を許可するが、オーバーレイされたテキストを信頼性高く生成するのは一貫して失敗する。
- ChatGPTは「All I Want for Christmas」のような装飾的な祝祭テキストを生成するのに優れているが、生きている政治指導者を刑務所設定で描くプロンプトをポリシーで拒否する。

単一のモデルで完全な画像を生成することはできなかった。矛盾する要素——政治的な風刺と感傷的な祝日のメッセージの組み合わせ——が拒否メカニズムや一貫性の失敗を引き起こす。LLMは、概念的に対立するコンポーネントを一つのまとまった出力に合成する能力が単純にない。私は二つの要素を別々に生成し、GIMPで手動でマージ・編集した。最終的な合成画像は間違いなく人間生成のものだった：私のコンセプト、私のコンポーネント選択、私の組み立てと調整。これらのツールがなければ、この風刺は私の頭の中に閉じ込められたままか、粗い棒人間として出てきて——視覚的なインパクトをすべて剥ぎ取られたものになっていただろう。

誰かがこの画像を「AI生成」と報告した。翌日、サーバーに生成AIコンテンツを禁止する新しいルールが導入された。このルール——そしてそれを引き起こしたミーム——が、私が「高次元的心とシリアルライゼーションの負担：LLMが神経多様性コミュニケーションに重要な理由」というエッセイを書いて公開する直接のきっかけとなった。私は、これらのツールが認知・創造的な支援としてどのように機能するかを振り返るきっかけになることを願っていた。しかし、それは管理者とのかなりぎこちないやり取りに変わった。

懐疑論者の立場とやり取り

管理者は、LLMは人間の利益のために開発されたものではなく、リソースの無駄と軍事化を助長すると主張した。彼はエネルギー消費、軍事とのつながり、モデルの崩壊、ハルシネーション、そして「死んだインターネット」のリスクを挙げた。彼はエッセイをざっと読んだだけだと明かし、強力なゲーミングワークステーションを所有しており、私的な娯楽のために先進的なローカルLLMを動かせること、そして友人を介してさらに大きなモデルにアクセスできることを認めた。

いくつかの矛盾が浮上した：

- 私の作業は、低電力で修理可能なRaspberry Pi 5 (5-15 W) 上で行われ、共有クラウドインスタンスを使用している。彼のローカルセットアップは、はるかに多くの専用エネルギー消費とハードウェアを必要とする。
- 彼が強力なLLMを「いじくり回す」ために使うハードウェアは、Intel、AMD、NVIDIAのような企業から来ており、これらは国防総省と数十億ドルの直接契約を結んでいる。

最も印象的だったのは、本物性を守るために禁止を強制する人物が、GrokやChatGPTの事実的・地政学的バイアスを積極的にストレステストしている人（私の公開監査を参照）を無視していることだった。

ホーキングの類比と管理者の言葉

管理者は自身を神経多様性だと自己認識しており、AIを支援技術としての可能性を認めていた。彼は視覚障害者向けの実時間キャプション付きメガネを「本当にクール」と称賛したが、「機械にエッセイを書かせたり絵を描かせたりするのは違う」と主張した。彼は付け加えた：「神経多様性の人はこれらのことできる、多くの人が障壁を克服してこれらのスキルを開発してきた。」また、自身のLLM体験をこう述べた：「トピックについてすでに知っているほど、AIを必要としない。知らないほど、ハルシネーションに気づき修正する能力が低い。」これらの発言は、支援の判断に深刻な非対称性を示している。

これと同じ論理をスティーブン・ホーキングに適用してみよう：

「音声合成器がより早くコミュニケーションするのに役立つことは認めますが、自然な声でもっと努力してみることを好みます。多くの筋萎縮性側索硬化症の人が障壁を克服して明確に話すようになりました——あなたもそのスキルを開発すべきです。機械は本物の話し方とは違うことをしています。」

または、彼自身の事実的正確性についての視点から：

「ホーキングが宇宙論についてすでに知っているほど、合成器を必要としない。知らないほど、機械の声のエラーに気づき修正する能力が低い。」

誰もこれを受け入れないだろう。私たちは、ホーキングの合成器が杖や希薄化ではなく、彼の卓越した心が、克服不可能な身体的障壁なしにその深い内容を共有できるようにする本質的な橋であることを理解していた。

管理者の線形的で人間中心の散文への快適さは、神經典型的な期待に近い認知スタイルを反映している。私のプロフィールは逆だ：事実的・論理的な深さは自然に来る（多言語出版プラットフォームを完全に自分で開発したように）、しかし人間の聴衆向けに構造化されたアクセスしやすい散文を産出するのは常に障壁だった——まさにエッセイが記述するもの。キャプション付きメガネや代替テキストを正当な支援として受け入れながら、認知的多様性のためのLLM支援を拒否するのは、恣意的な境界を描くことだ。Mastodonやより広いFediverseは包摂性を誇りにしているのに、これは新しい門番を生む：特定の支援は歓迎され、他は個人の努力で克服すべきもの。

歴史の反響：変革的なツールへの抵抗

生成AIの公的使用に対する全面拒否は、技術史を通じて繰り返されるパターンを反映している。19世紀初頭のイングランドでは、熟練織工のラダイトが職と生計を脅かす機械織機を破壊した。都市のガス灯点灯夫はエジソンの白熱電球に反対し、廃業を恐れた。馬車夫、厩務員、馬育種家は自動車を生活様式への実存的脅威として抵抗した。専門の写本家や製図家は複写機を警戒し、手作業の価値を低下させると信じた。組版工や印刷工はコンピュータ化された組版システムに闘った。

すべての場合、抵抗は本物の恐れから来ていた：新技術が彼らが誇るスキルを陳腐化し、経済的役割と社会的アイデンティティを挑戦した。変化は人間労働の価値低下のように感じられた。

しかし歴史はこれらのイノベーションをより広い影響で評価する：機械化は苦役を減らし大量生産を可能にした；電気照明は生産時間を延長し安全を向上させた；自動車は個人的移動性を与えた；複写機は情報アクセスを民主化した；デジタル組版は出版を速くアクセスしやすくした。今日、伝統的な職を守るためにガス灯や馬車に戻りたい人は少ない。ツールは人間の能力と参加を拡大し、縮小した以上に増大させた。

生成AI——認知や創造の補綴として使用される——は同じ軌道を辿る：人間の意図を根絶するのではなく、実行の障壁で制約されていたアイデアの表現を拡張する。それを全面拒否するのではなく、ラダイトの衝動を繰り返すリスク——馴染みのプロセスを守る代償に、より広い参加を犠牲にする。

結論：どの支援が受け入れられるかを誰が決めるか？

このエッセイで語られた出来事——一つの報告された画像、一つの急ごしらえの禁止、一つの長引く議論——は、技術に関する局所的な不一致以上のものを露呈する。それはより深く根本的な質問を明らかにする：**どの支援が受け入れられ、どれが受け入れられないかを誰が決めるのか？** 支援を必要とする皮膚と脳の中に生きる人々——日常の経験から、能力と完全な参加の間のギャップを埋めるものを知る人々——が決めるべきか？ それとも、善意であれ、その生きた現実を共有せず、障壁の重さを体感できない外部者が？

歴史はこの質問に繰り返し答え、ほとんど常に同じ方向で。車椅子はかつて依存を奨励すると批判された；聾教育システムは長く、手話ではなく唇読みと口頭話法を学ぶことを主張した。すべての場合、障害に最も近い人々が最終的に勝った——コスト、アクセス、潜在的誤用の懸念を否定したからではなく、それが彼らの代理性と尊厳を実際に回復するものだったからだ。

大規模言語モデルや他の生成ツールでは、私たちは再び同じサイクルを生きている。使用を門番する多くの人は、線形支援、物語の流れ、急速なシリアルライゼーションが疲弊する外国語翻訳タスクのように感じる特定の認知・表現の障壁を経験していない。外部から、「もっと努力しろ」や「スキルを開発しろ」は合理的に聞こえるかもしれない。内部から、ツールは努力の迂回路ではなく、ランプ、補聴器、義肢——既存の努力をようやく世界に届けるものだ。

最も深い皮肉は、門番が神経多様性を自己認識するのに、その特定の神経が判断される領域で神経典型的な期待に近い場合に生じる。「私はこの方法で克服したから、他者もそうすべき」は理解できるが、それでも門番として機能する——神経典型的な権威から来る時に批判する規範を再現する。一貫した倫理原則が必要だ：

- 障害に最も近い人が、意味ある参加を可能にするものの主要な権威である。
- 外部批判は集団的害（環境影響、誤情報リスク、労働変位）については正当だが、支援自体の内部正当性についてはそうではない。

特に明らかな二重基準は、生成AI使用の明示的開示を広く要求することだ。私たちは他のほとんどの支援に同様の開示を要求しない。逆に、それらを不可視にする技術的進歩を祝う：厚いメガネをコンタクトレンズや屈折手術に；かさばる補聴器をほぼ不可視に；集中、気分、痛みの薬を私的に摂取し脚注や免責なしに。これらの場合、社会は慎重で隠れた使用を進歩として扱う——尊厳と正常性の回復として。しかし認知や表現の支援になると、脚本が反転：今はフラグを立て、発表し、正当化しなければならない。不可視は望ましいのではなく疑わしいものになる。この選択的な透明性要求は、真に欺瞞防止についてではなく、助けられない人間の著作という特定のイメージの快適さを保つことについてだ。身体的修正は消えることを許される；心の修正は目立つ目印を残さなければならない。

一貫性を保つなら、すべての支援に開示を要求するか（ばかげて侵入的な要求）、または認知ツールを特別に厳しく扱うのを止めるべきだ。原則的な立場——自律と尊厳を尊重するもの——は、各人が自分の支援の可視性や不可視性を決められるようにし、一つの支援形式を標的にした罰則ルールなしに、既存の創造性と知性の概念を揺るがすからという理由で。このエッセイは一つの特定のツールの擁護だけではない。それは、障害者と神経多様性の人々が、自分のアクセスニーズを定義するより広い権利の擁護だ——自分の靴を履いたことのない者に正当化する必要なしに。その権利は論争の的になるべきではない。しかし、前述の記述が示すように、まだ論争の的だ。